

制服としての看護服の変遷と現代における看護服のデザインの違いが  
看護師および患者に与える心理的影響  
Changes in Nursing Uniforms and the Psychological Effects of Differences  
in their Designs on Nurses and Patients

庄山 茂子<sup>\*1+</sup>, 栢原 裕<sup>\*2+</sup>, 窪田 恵子<sup>\*3+</sup>, 青木 久恵<sup>\*3+</sup>  
Shigeko Shoyama<sup>\*1+</sup>, Yutaka Tochihara<sup>\*2+</sup>, Keiko Kubota<sup>\*3+</sup> and Hisae Aoki<sup>\*3+</sup>

\*1 長崎県立大学国際情報学部 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1

Faculty of Global Communication, University of Nagasaki,  
1-1-1 Manabino, Nagayo-cho, Nishisonogi-gun, Nagasaki, Japan

\*2 九州大学大学院 芸術工学研究院

Faculty of Design, Kyushu University

\*3 福岡女学院看護大学看護学部

School of Nursing, Fukuoka Jo Gakuin Nursing College

<sup>+</sup>服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract : When Japan's first training for nurses started in 1885, two types of Western clothing were worn at training schools: formal and casual clothes. At that time, people were usually dressed in Japanese-style clothing, and only a few Japanese men, such as high-ranking government officials and civil servants, wore Western-style uniforms. In this sense, Western-style uniforms adopted for nurses in training reflected the perception of the high occupational status of the nursing profession held by the founders of the first training schools. Since the beginning of the Showa era, which brought about the diversification of fashion and an explosion of the popularity of the pants style and designer clothes, more emphasis has been placed on the designs, as well as functionality, of nursing uniforms, including their colors and styles. These changes are partly attributed to the revision of the Equal Employment Opportunity Law and issue of white-coat hypertension. According to the results of surveys on nursing uniforms involving hospitals in Japan, nursing uniforms have been recognized as an important element required to help a hospital become more attractive, and a large number of hospitals have reviewed the designs of nursing uniforms. A survey involving nurses and patients was conducted to assess their impressions of nursing uniforms with varying designs. For both nurses and patients, white uniforms were associated with reliability and responsibility, and flower-patterned and pale-colored uniforms with compassion and familiarity.

---

\*1) shoyama@sun.ac.jp

**要旨：**我が国では 1885 年に看護婦養成がはじまり、養成所で着用された制服は、式服と平常着に区別されていて、洋装のスタイルであった。当時の人々は和装で、高位高官や公務に携わる男子など限られた人々の職業服が洋装であったことから、看護婦養成所の制服は、看護婦という職業の確立を目指した創立者の思いが反映されていたと考えられる。昭和の時代になり、ファッションの多様化、パンツファッションやデザイナーズブランドの流行とともに、看護服は、機能性だけでなく、色やスタイルなどのデザイン性も重視されるようになった。スタイルの変化には、男女雇用機会均等法の改正や白衣高血圧症が問題視されるようになった背景も考えられた。全国の病院を対象にした看護服の実態調査より、現在、看護服は魅力ある病院づくりの要素としてとらえられ、多くの病院で看護服のデザインの検討がなされていることが明らかとなった。デザインの違いによる印象評価に関する調査では、白衣は患者、看護師の両者から信頼や責任感の評価が高く、ペールトーンの花柄は思いやりや親しみの評価が高いことが明らかとなった。

### 配当決定額

平成 22 年度	641,000 円
平成 23 年度	1,280,000 円
平成 24 年度	1,256,000 円
合計	3,177,000 円

### 研究の目的

我が国においては、1885 年に看護婦養成の教育がはじまっている。当時の服装は、袴のような長いスカートに草履というスタイルで機能的な制服とは言い難い。その後、ワンピーススタイルが採用され、現在では、ワンピースに加え、パンツやスカートと上衣を組み合わせるなど様々なスタイルの看護服が着用されている。しかも白だけでなく多様な色や柄の施されたものが見受けられる。このような看護服の変化には、機能性の向上、男性看護師の増加、現代ファッションスタイルの個性化、白衣高血圧症が問題視されるようになったことなど、様々な背景が考えられる。これまで、看護服の機能性に関する研究では、主に細菌学的汚染調査や抗菌素材使用のナースウェア製作など衛生面からの研究がなされている[1~4]。被服は、着用者の気分やパーソナリティ、職業といった情報を伝達する機能を持つ非言語コミュニケーションのメディアとみなされるため、看護服は、看護師の印象形成に影響を与えている。近年、白衣が威圧感や恐怖感を増幅させることが問題視されるようになり、高齢者や妊婦を対象に白衣高血圧の頻度や原因について心理学や生理学的視点から研究がなされている[5~7]。

一方、被服の購買行動と自己概念には関連があるとともに、被服は着用者の気分や感情、動作に影響を与えている。加藤ら[8]は、ワンピースとブラウスとスカートの単一あるいは配色の組み合わせの差異が個人の生体に異なる影響を与えることを明らかにし、沼田と中川[9]は、衣服の色彩が着用者の感情に及ぼす効果は非常に大きく、色によって特有の感情を生起することを明らかにしている。これらは、看護服を対象とした研究ではない。

以上のように、看護服について、衛生面や白衣高血圧症に着目した研究は数多くなされてきた。看護服の歴史に関する研究[10]はなされているが、日常着の洋装化や学校や企業の制服制定からみた研究は見受けられない。また、近年、病院において採用され始めている、彩度の強い色の看護服や柄の異な

るデザインについて看護師と患者の視点から心理学的に分析した研究も見受けられない。看護服は、看護師の印象形成に影響を与えているだけでなく、色によって着用者に特有の感情を生起するとすれば、患者と看護師の双方からの心理的研究が求められる。そこで、まず制服としての看護服の歴史の変遷を社会の変化や文化的背景から明らかにするとともに、現在病院で、どのような看護服が採用されているか全国調査を行う。さらに、歴史に関する文献研究と実態調査の結果を基に、スタイルや色の違いに着目し、異なるデザインの看護服に対して、どのような印象の違いがみられるか看護師ならびに患者の心理的視点からフィールド調査を行い、今後の看護服に求められるデザインを明らかにすることを目的とする。

## 研究の方法

本研究は、制服としての看護服の変遷を社会の変化や文化的背景からみる文献調査と現在の病院において採用されている看護服に関する全国調査、さらに文献調査と全国調査をふまえて看護服のデザインの違いが看護師および患者に与える心理的影響を明らかにするフィールド調査の3つの手法による研究を行う。

## 研究の実施計画

### 「22年度」

- (1) 看護服の歴史の変遷を文献調査により社会や文化的背景から分析する。特に、看護婦養成における制服としての看護服の始まりに着目し、看護婦がどのようにして養成されるようになったのか、看護婦養成の視点から看護服の始まりをみる。
- (2) 我が国の病院における看護服の実態を明らかにするために、看護服に求められる機能性、デザイン性、問題点等について明らかにしたうえで、調査票を作成する。そして、全国の臨床研修病院 809 病院を対象に、アンケート調査を行う。看護服に対する病院の視点(着せる)、看護服に対する看護師の視点(着る)、看護服に対する患者の視点(見る)から質問し、さらに採用している看護服、今後の看護服についての考え方等を調査する。

### 「23年度」

- (1) 看護服の歴史の変遷を文献調査により社会や文化的背景から分析する。特に、日常着が和服から洋服へと洋装化し、学校や企業において制服が制定される中で看護服がどのような変遷を辿ってきたのかを明らかにする。
- (2) 22年度に実施した、看護服の実態調査についてまとめる。
- (3) (2)の調査結果より最も多く選択されているスタイルを抽出し、実際に病院で看護師に着用してもらい、異なるデザインでどのような印象の違いがみられるか病院スタッフと患者双方の視点から調査する。

### 「24年度」

- (1) 22年度、23年度の文献調査を基に、看護服の歴史の変遷を社会や文化的背景からまとめる。
- (2) 23年度に行った異なるスタイルのデザインについての印象評価を分析し、まとめる。
- (3) 同一スタイルにおいて、異なる色の看護服に対して、どのような印象の違いがみられるか患者の視点から調査する。
- (4) 文献研究、全国調査、フィールド調査より今後の看護服に求められるデザインを総括する。

## 研究の成果

### 1. 我が国の看護婦養成における制服としての看護服の始まりと文化的背景

#### (1) 我が国の看護婦養成において着用されていた最初の看護服

我が国における看護婦養成の始まりは、1885年に最初の看護婦養成所として創設された有志共立東京病院看護婦教育所である[11]。高木兼寛氏が1881年に成医会講習所を開設し、その後、患者中心の医師を育成するには、病院が不可欠であるということで1882年に有志共立東京病院を設立した。病院には、資金不足で看護婦が一人もいなかったため、大山捨松女史らの婦人慈善会の会員が病院を参観した際、経済的援助を約束したという。大山女史らは、1884年とその翌年に鹿鳴館を会場に「鹿鳴館慈善バザー」を2度開催している。バザーで得られた収益金が寄付され、これを1885年に有志共立東京病院看護婦教育所の設立に当てたとされている。1887年頃の養成所での服装は、式服と平常着に区別されていた。平常着は真岡木綿の筒袖の上着と下はズボンのように仕立てられ、幅の狭い帯を巻き、衿もとから白い前かけをかけ、その上からベルトをしめていた。履物は、病室内では足袋はだしで、廊下では草履を履いていた。帽子は白い寒冷紗であった。式服は、行啓時や式に着用され、1888年に1回生が卒業する時に製作されている。白キャラコ地を用いた八枚はぎの裾の長いスカートで、袖肩はパッドを入れて高く、衿は詰衿で、カフスとベルトには麻の芯が入っていた。帽子も同じキャラコで作られていた[12、13]。



平常着



式服

Fig.1.1 Uniforms for students of Yushi Kyoritsu Tokyo Hospital School

図 1.1 有志共立東京病院看護婦教育所の看護服<sup>[13]</sup>

#### (2) 海外の看護服や被服文化の影響

有志共立東京病院看護婦教育所の創設者である高木氏は、1875年に英国のセントトーマス病院医学校に入学した[12]。セントトーマス病院には、ナイチンゲールが創設した看護婦学校があったことから、高木氏はナイチンゲールの影響を強く受け、正式な教育を受けた看護婦の必要性を痛感していた。彼の講演においては、日本の着物の広袖や両足を一つの布でくるむ裾等の構造上の非活動性だけでなく、体を締め付ける帯や素材の通気性や保温性にもふれ被服衛生上のマイナス面も指摘している。また、1884年に有志共立東京病院看護婦教育所の初代教師として米国人ミス・リード(Mary E.Reade)女史が招かれ、看護婦教育を行った。リード女史は、看護婦の象徴である帽子 54個と前掛け 26枚を寄付し、看護の知識や技術の教育だけでなく服装を整えることにも力を注いでいた[13]。その他、最初の有志共立東京病院看護婦教育所の制服に影響を及ぼした人物として大山捨松女史があげられる。1871年、欧米視察の岩倉具視大使一行に、将来の女子教育にそなえて、女性5名がふくまれていた。吉益亮子、上田貞子、山川捨松、永井繁子、津田梅子女史の5名は、洋服を着た少数の最初の日本婦人たちと考えられている[19]。山川捨松女史は、1882年に帰国し、結婚して大山の姓になった。先述した鹿鳴館慈善バザーにより、看護婦養成所創立を援助した人物である。彼女は、留学中に、ニュー・ヘブン病院の看護婦コースで学んだことで、日本の看護婦教育に関心を持ったといわれている[12]。以上のように、看護婦養成所で着用された看護服は、高木氏のイギリス留学経験や米国人の指導者の来日、海外に留学した大山捨松女史により、海外の看護婦の制服や海外の被服文化の影響を受けたと考えられる。

### (3) 明治時代の服装からみた看護服

女性の洋装がみられたのは、文明開化につぐ欧米の模倣がみられた鹿鳴館時代だった。鹿鳴館時代に欧米の模倣がなされても、洋服を着用したのは限られた一部の人々であった。明治期に、洋装は上流階級の夫人から始まり、その後知識階級に広がった[14]。1885年9月に東京女子師範学校の教員生徒が洋服に改めたのが始めとされているが、有志共立東京病院看護婦教育所においても、ほぼ同時期に平常着として洋服に近い制服が採用されている。東京女子師範学校の卒業写真では、1883年は和装の着流しがみられ、1886年は洋装であった。1893年には和装と洋装の両方がみられ、1899年には和装が、1900年、1912年には和服に袴がみられた[15]。東京女子師範学校の卒業写真より、数年で洋装が廃止されていることがみられる。その背景には、女子学生の洋装を支持していた森有礼の暗殺や、欧化主義に対する反動、国家主義体制の確立化に向けた教育政策等があったという[16]。このように師範学校では、洋装が廃止されているのに対し、1904年の府立大阪医学校附属看護婦養成所[17]や1912年の有志共立東京病院看護婦教育所の卒業写真[13]では洋装がみられる。明治の職業婦人は、お針子、活字工、製本女工、電話交換手、写真師、医師などにみられたが、看護婦と写真師を除き、いずれも和装に東髪というスタイルであった[14]。明治政府は洋装化を進めていたが、明治時代の女性の服装は和装が主流であり、明治中期でも一般の女性には洋装がほとんどみられなかった。看護婦養成所の制服に洋装が採用され、師範学校において洋装から和装に変わる中でも洋装が着用され続けた。当時は、高位高官や公務に携わる男子の職業服が洋装であったことから[18]、看護婦養成所の制服は、看護婦という職業の確立を目指した創立者の思いが反映されていたと考えられる。

## 2. 大正、昭和から現在に至る制服としての看護服の変遷

大正から現在までの看護服について、職業服、被服の流行と比較しながらどのように変化したのかを概観する。職業服や被服の流行については、「写真にみる日本洋装史」[14]、「表現としての被服」[20]、「服飾と心理」[21]を参照した。日本女性の洋装化には、大正期の「職業婦人」の果たした役割は大きかったという。大正半ばまでの職業婦人たちの職業服は、和装中心であった。しかし、第1次世界大戦から帰国した日本赤十字の看護婦たちの服装は、洋装であった。1919年に東京市街自動車株式会社が女性車掌を採用し、白衿の制服を取り入れ、1924年には、東京市電気局乗合自動車の女性車掌を採用し、赤衿の制服を取り入れている。このようにして、職業服としての洋装が広がってきたといわれている。

不況が続いていた日本経済は、1923年の関東大震災によりさらに悪化し、1927年の金融恐慌やその後の世界的な恐慌により昭和初期の経済は低下した。しかし、都会では、百貨店が繁盛しモダンボーイやモダンガールとともにモダニズムが浸透した。ヨーロッパ風俗が、職業婦人やモダンガールとともに市民間に広がったのはこの頃からである。洋服が一般の庶民に浸透した象徴として、女性の夏季用洋服で、簡単服ともよんだアツパツパの流行がある(図 2.3①)。体を締め付けない開放的なスタイルが日常着として流行したが、看護服のデザインはウエストを締めた、毅然としたスタイルであった(図 2.1②)。1937年に日中戦争が始まると、国民生活は統制され配給による生活となった。1940年に国民服が制定されている。これに呼応して女性の和服には、モンペの着用とたもとを切って活動的に仕立て直すことが奨励された。日常着としてのモンペの女性(図 2.3②)と同様に太平洋戦争中の看護師(図 2.2)にもモンペ姿がみられた。

戦後の日本は、アメリカのGHQ占領政策により国家体制は変革し、民主主義や男女同権の息吹を感



Fig.2.1 History of uniforms for nurses of Osaka University Hospital  
 図 2.1 大阪大学医学部附属病院看護職員白衣の変遷<sup>[22]</sup>



1941～45年頃

Fig.2.2 Nursing uniforms used during the period of the Pacific War  
 図 2.2 太平洋戦争中の看護婦<sup>[23]</sup>



Fig.2.3 Women's fashion in the Showa period  
 図 2.3 昭和の女性ファッション<sup>[23]</sup>

Fig.2.4 Dior's new-look fashion  
 図 2.4 ディオールのニュールック<sup>[23]</sup>

じる時代となった。女性のおしゃれに対する関心は強く、いかり肩の「ミタリールック」が流行している(図 2.3③)。いわゆる、流行はアメリカスタイルであった。1948 年に女性らしさを強調したディオールの「ニュールック」(図 2.4) (1947 年発表) がアメリカを通して紹介された。1953 年のディオールの来日をきっかけに 1950 年代は、パリ・モード志向へと変わり、男性的なミタリールックに対し、「ニュールック」のような細いウエストですそ広がりスカート的女性でエレガントなシルエットが流行した(図 2.3④)。この頃の看護服のデザイン(図 2.1④⑤)もウエストを締め、わずかに広がる女性的なスカートのラインになっていた。1958 年から 64 年は、資本主義経済が成長し、技術革新による生産拡大により大量生産システムが確立し、作れば売れる時代から売れるモノを作るメーカー主導型のマーケティング時代となった。1965 年から 1969 年はファッション革命期といわれ、戦後生まれの若者たちをターゲットにした生産がなされた。ミニスカートが爆発的に流行し、1967 年にミニの女王と言われた「ツイギー」が来日して以来、制服、マタニティドレス、フォーマルドレスまでもミニに変革した。当時の航空会社のスチュワーデス(現在の客室乗務員)の制服は、1970 年以降ひざ上丈を採用し(図 2.3⑤)、看護服においてもひざ上丈がみられた(図 2.5①)。

1970 年から 1979 年はファッション多様化時代とよばれ、ドルショック、オイルショックを契機に狂乱物価と不況が進行し、「消費は美德」から「節約は美德」を重視するようになり価値観が変化し量より質を重視する時代となった。スカート丈は、マイクロミニやミニからマキシ、ミディ、ミモレが復活し、ひとりひとりが好みの組み合わせを楽しんだ。1971 年には、パンタロン、バミューダ、キュロット、ニッカーズ、ホットパンツなど多彩なパンツファッションが流行した。また、この時代には、森英恵、山本寛斎らの日本人デザイナーが世界のファッション界に登場した。1980 年からファッションの個性化時代とよばれ、「工業化社会」から「情報化社会」へ、「経済優先の社会」から「人間文化優先」の社会に変化した中で、衣生活においては、自分

の趣味や好みにあった個性的で快適な衣服を求めるようになった。この時代は、デザイナーたちが、それぞれの DC ブランドを掲げて市場に進出した。1990 年代には、ストリートファッションが台頭し、1990 年代後半にはユニバーサルデザインの視点から、素材やデザイン、サイズやパターンなど検討するようになった。

1915 年「永井商店」として創業し、メディカルウェアを企画・製造・販売しているナガイレーベン株式会社では、1968 年にカラー白衣をホワイトティハーモニーとして商品化し、1974 年にパンタロンという形でパンツスタイルを商品化した。さらに、1980 年にデザイナーズブランドの商品化をはじめている[24]。このようにファッションの多様化、パンツファッションの流行、DC ブランドブームとともに、看護服メーカーも、機能性だけでなく、色やスタイルなどのデザイン性も重視するようになったといえる。



ミニ丈  
1971 年  
①



パンツスタイル  
1974 年  
②



デザイナーズブランド  
1980 年代  
③



Fig.2.6 Uniforms for nurses of  
Jikei University Kashiwa Hospital.

図 2.6 東京慈恵会医科大学附属柏病院<sup>[26]</sup>

Fig.2.5 Changes in nursing uniforms.  
図 2.5 看護服のデザイン変化<sup>[24]</sup>

ナガイレーベン株式会社のワンピースとナース上衣の販売枚数の比をみると 1992 年は 79.5 対 20.5 とワンピースがナース上衣の約 4 倍で、ワンピースが多く採用されていた。1999 年には 65.1 対 34.9 とワンピースが減少し、2004 年には 46.4 対 53.8 となり、ナース上衣の方がワンピースより多く販売されている[24]。この数字からもパンツスタイルが、近年多く採用されていることがうかがえる。その背景には、パンツファッションが流行していることやパンツが非常に動きやすいことにあると考えられる。しかし、それだけでなく、1999 年の男女雇用機会均等法の改正等により従来、女性を「看護婦」、男性を「看護師」としていたものを「看護師」に代えるための保健婦助産婦看護婦法改正が成立(2001 年 12 月)したことも背景として考えられる。2002 年から看護師が誕生したことにより男性の看護師が増えていることから、パンツスタイルは、男女が共同して参画するスタイルを表現していると推察される。

アメリカのユニフォームメーカーの **CHEROKEE** によると 1990 年代から従来の白の冷たいイメージを緩和する色物が採用され始めたことと、看護服を自分で選ぶことは、看護師としてのプロ意識のあらわれであると紹介している[25]。日本においても 1990 年代から白衣高血圧症が問題となり学会等で報告されるようになった。このことで、多くの病院で白衣から色物を採用するようになったと考えられる。さらに、海外の影響として、東京慈恵会医科大学附属病院[27]ではアメリカで構築された経営哲学である Fish 哲学を取り入れている。そこには、楽しく遊び心をもつ、人を喜ばせる、注意を向ける、態度を選ぶの 4 つの原理があり、看護師の制服の採用にもこの哲学が生かされている(図 2.6)。

以上のように、大正、昭和から現在の看護服へのデザインの変化には、洋装化した衣服の流行の影響や男性看護師の増加、白衣高血圧症等の患者の立場からの問題点、専門職としての意識、イキイキとした環境づくり等の様々な背景がみられた。

### 3.女性用看護服に関する全国調査

#### 3.1 調査の目的

近年、機能性や衛生面とともに、患者の心理面にも配慮し、様々な色や柄の看護服が採用されている。本調査では、表現メディアとしての看護服に着目し、患者と看護師にとって最適な看護服のデザインを明らかにするために、全国の病院を対象に看護服の実態調査を実施した。

#### 3.2 調査の概要

(1)対象:全国の臨床研修病院 809 病院、回答者:看護部統括責任者、(2)調査時期:平成 23 年 1 月～2 月、(3)調査方法:郵送法(回収率 58.1%)、(4)調査内容:所在地、診療科、看護師数、ベッド数、看護服に対する病院(着せる)、看護師(着る)、患者(見る)の視点からの質問、採用している看護服、今後の看護服について、(5)分析方法:単純集計

#### 3.3 結果

回答の得られた病院の所在地と看護師数を表 3.1 と 3.2 に示した。ベッド数、100 床未満の病院は 0.4% で、300 床以上 400 床未満の病院が最も多く、全体の 26.1% で、200 床以上 500 床未満の病院は、全体の 59.0% を占めた。

Table3.1 Address of the hospital

表 3.1 病院の所在地

地域	数 (割合%)	地域	数 (割合%)
北海道	24 ( 5.1)	近畿	99 (21.1)
東北	45 ( 9.6)	中国	33 ( 7.0)
関東	102(21.7)	四国	17 ( 3.6)
信越	24 ( 5.1)	九州	32 ( 6.8)
北陸	25 ( 5.3)	沖縄	3 ( 0.6)
東海	65 (13.9)	有効回答	469 (100)

Table3.2 Number of nurses

表 3.2 看護師の数

看護師の人数	数 (割合)
50 人以上 100 人未満	8 ( 1.7)
100 人以上 300 人未満	204 (43.7)
300 人以上 500 人未満	149 (31.9)
500 人以上	106 (22.7)
有効回答	467 (100)

全体の 87.8% の病院は、看護服を指定していた。また、全体の 89.5% は、看護服を魅力ある病院作りの要素ととらえていた。病院は、看護師の体型や診療科に配慮して看護服を採用していた。特に、産科系の診療科において配慮なされていた。採用している看護服の多くは、白のパンツスタイルと白のワンピースであった。

全体の 90.3% は、看護服の採用に看護師の意見を取り入れ、素材では、透け防止、肌触り、伸縮性に配慮していた。動きやすさのための配慮では、「上着丈」による調整や「パンツを採用」が多かった。

患者からの視点では、患者に「清潔なイメージを与える」配慮が最も多かった。特に、「清潔なイメージを与える」、「他の職種と識別する」、「リラックスさせる」ために色彩による工夫がなされていた。患者に信頼のあるイメージを与えるために白を基調としていたが、患者をリラックスさせるために、白を廃止し、淡い色、暖かい色、優しい色を採用していた。このように白にはプラスとマイナスのとらえ方がみられた。

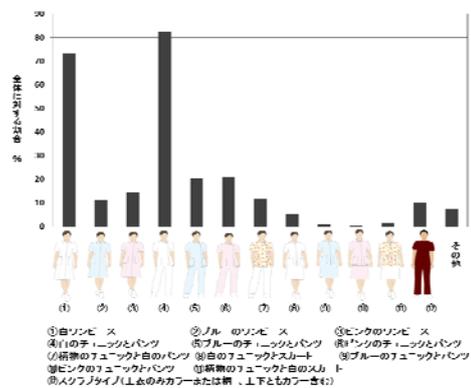


Fig.3.1 Nursing uniforms adopted

図 3.1 採用している看護服

## 4.異なるデザインの看護服に対する印象評価

### 4.1 調査の目的

表現メディアとしての看護服に着目し、患者と看護師にとって最適な看護服のデザインを明らかにするために、異なるデザインの看護服に対してどのような印象の違いがみられるか病院スタッフと患者双方の視点から調査を実施した。

### 4.2 調査の概要

(1) 図 4.1 に示す 6 種類のサンプルを用いた。(サンプル 1: 白のワンピース、2: 白のチュニックと白のパンツ、3: 白地にペールピンクの花柄チュニックと白のパンツ、4: 白地にペールピンクの花柄スクラブと白のパンツ、5: パープリッシュピンクのスクラブと白のパンツ、6: ダークレッドパープルのスクラブと白のパンツ、3と4は同じ花柄である。)(2) 調査場所: 福岡県内の泌尿器科専門病院と外科医院、長崎県内の歯科診療所、(3) 調査対象者: 患者(全 922 名、平均年齢 54.1 歳、SD18.8)ならびに病院スタッフ(全 337 名、平均年齢 39.6 歳、SD11.8)、(4) 調査時期: 2011 年 8 月～9 月、(5) 調査方法: 3 病院において各サンプルを着た看護師をみて質問紙調査で回答を求めた(回収率 100%)。 (6) 調査内容: ①性別、年齢、病気に対する不安、②6 種の看護服に対する好ましさ 5 段階評価、③6 種の看護服に対するイメージ評価(7) 分析方法: 単純集計、フィッシャーの直接確率法、因子分析、一元配置分散分析。



Fig.4.1 Samples used in the survey  
図 4.1 調査に用いたサンプル

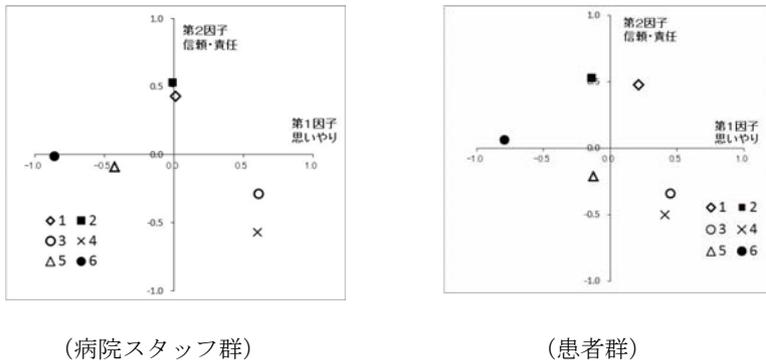


Fig.4.2 Distribution of first- and second-factor scores  
図 4.2 第 1 因子と第 2 因子の得点分布

### 4.3 結果

6 種のサンプルの好ましさについては、「やや好ましい、好ましい」の割合が高いのは、患者群と病院スタッフ群ともにサンプル 3 で、「あまり好ましくない、好ましくない」の割合が高いのは、両群ともにサンプル 6 であった。サンプル 6 のみに患者の病気に対する不安と看護服の好ましさに関連がみられ ( $p < .05$ )、不安のある患者の方がサンプル 6 を「好ましくない」と回答した。病院スタッフ群と患者群とで各サンプルの印象に有意差が多くみられたのは、サンプル 1 であり、患者群の方がサンプル 1 を高く評価した。因子分析の結果、病院スタッフ群では、「思いやり、信頼・責任、活動性、洗練」の 4 因子、患者群では、「思いやり、信頼・責任、積極性、活動性」の 4 因子が得られた。「思いやり」の因子は、花柄の看護服の因子得点が高く、「信頼・責任」の因子は、白のワンピースと白のパンツスタイルの得点が高かった(図 4.2)。今後、患者の不安や緊張を和らげ、病院への信頼を高めるデザインの工夫が求められる。

## 5.異なる色の花柄デザインの看護服に対する印象評価

### 5.1 調査の目的

表現メディアとしての看護服に着目し、異なるスタイルの看護服の印象の違いを明らかにした研究では、患者は花柄のチュニックにパンツを着用した看護師に対し、癒しや思いやりを感じ、看護服として最も好ましいと回答した。そこで、本調査では異なる3色の花柄に対し、患者が受ける印象にどのような違いがみられるか明らかにすることを目的とした。

### 5.2 調査の概要

(1) 図 5.1 に示す 4 種類のサンプルを用いた。上衣は丸襟チュニックで下衣は白のパンツである。サンプル 1~3 は白地にペールトーンの異なる色の花柄である(1:ピンク、2:ブルー、3:イエロー、4:無地白)。



Fig.5.1 Samples used in the survey  
図 5.1 調査に用いたサンプル

(2)対象病院:福岡県の外科医院、(3)対象者:外来患者 192 名(平均 45.4 歳、SD 14.3 歳)、(4)実験時期:2012 年 7 月、

(5)調査方法:看護師は、異なる 4 種のサンプルを着用し、患者に質問紙調査で回答を求めた(回収率 100%)。

(6)調査内容:性別、年齢、病気や治療に対する不安、看護服の好ましき、25 項目のイメージ(7)分析方法:単純集計、フィッシャーの直接確率法、因子分析、一元配置分散分析

### 5.3 結果

看護服として「好ましい」割合が最も多いのは、サンプル 1 で、次はサンプル 4 であった(図 5.2)。好ましきについては、4 サンプル間に有意差がみられた( $p < .05$ )。各サンプルとも、好ましきに性別や世代間の有意差はみられなかった。病気や治療に対する不安の程度と看護服の好ましきには関連はみられなかった。4 種のサンプルのイメージについて、25 項目中 18 項目で有意差がみられた。白無地は花柄より「地味である、個性的でない、清潔である、真面目な印象」のイメージであった。看護服のイメージ構造を明らかにするために因子分析(主因子法、プロマックス回転、固有値 1 以上)を行った結果、「思いやり・癒し、信頼・責任、活動性、デザイン性、清潔感」の 5 因子が抽出された。各因子についてサンプルごとに平均因子得点を求めサンプル間の違いを比較した結果、第 3 因子の「活動性」を除く 4 因子で有意差がみられた( $p < .05$ )。第 1 因子の「思いやり・癒し」ではサンプル 1 の得点が最も高かった。第 2 因子の「信頼・責任」では、サンプル 4 が最も高く、サンプル 3 が最も低かった(図 5.3)。

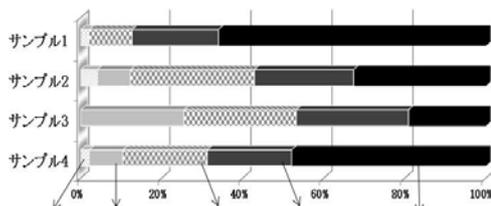


Fig.5.2 Favorability rating of the six types of nursing uniform  
図 5.2 看護服の好ましき

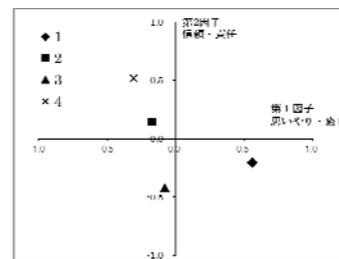


Fig.5.3 Distribution of first- and second-factor scores  
図 5.3 第 1 因子と第 2 因子の得点分布

## 6.まとめ

明治時代の女性の服装は、和装が主流であり、明治中期でも一般の女性には洋装がほとんどみられなかった中で、1885 年に創立された看護婦養成所の制服に洋装が採用された。当時、高位高官や公務に携わる男子などの限られた人々の職業服が洋装であったことから、看護婦養成の制服は、看護婦という

職業の確立を目指した創立者の思いが反映されていたと考えられる。昭和の時代になり、ファッションの多様化、パンツファッションやデザイナーズブランドの流行とともに、看護服は機能性だけでなく、色やスタイルなどのデザイン性も重視されるようになった。その他、1999年の男女雇用機会均等法の改正や白衣高血圧症が問題視されるようになった背景も考えられた。全国の病院を対象にした調査では、看護服は魅力ある病院づくりの要素としてとらえられていた。多くの病院で、看護服のデザインの検討がなされていた。また、デザインの違いにより異なる印象が認められた。患者から信頼を得るためには白衣、親しみや思いやりを感じさせるのは、花柄であったことから、今後は1つのスタイルに限定するのではなく、複数のデザインにより対応することや、両方を満足させるデザイン展開が求められる。

**追記** 4.5.のフィールド調査は、長崎県立大学一般研究倫理委員会の承認を得て遂行しました。

**謝辞** 全国調査にご協力いただきました各病院の看護部統括責任者の皆様、印象評価の調査にご協力をいただきました長崎、福岡県の3病院の患者様や看護師ならびに関係各位に感謝申し上げます。また、看護服の歴史について貴重な資料をご提供いただきましたナガイレーベン株式会社の各位、印象評価調査におけるサンプルについて有益な助言ならびにご協力をいただきました(株)ワコール人間科学研究所ならびにフォーク株式会社の各位に感謝申し上げます。

## 主な発表論文等

### [論文]

1. 庄山茂子、青木久恵、窪田恵子、栃原裕、「異なるデザインの看護服に対する印象評価」、繊維製品消費科学会誌 第54巻第2号 62-69 (2013)
2. 庄山茂子、青木久恵、窪田恵子、栃原裕、「看護服に関する全国調査」、繊維製品消費科学会誌 第54巻第2号 54-61(2013)
3. 庄山茂子、栃原裕、窪田恵子、青木久恵、「制服としての看護服の変遷と現代における看護服のデザインの違いが看護師および患者に与える心理的影響」、服飾文化共同研究報告 2011 3-8 (2011)
4. 庄山茂子、栃原裕、窪田恵子、青木久恵、「制服としての看護服の変遷と現代における看護服のデザインの違いが看護師および患者に与える心理的影響」、服飾文化共同研究報告 2010 65-68 (2010)

### [学会発表]

1. 庄山茂子、青木久恵、窪田恵子、栃原裕、「異なる色の花柄デザインの看護服に対する印象評価」、人間-生活環境系学会大会 第36回人間-生活環境系シンポジウム(2012年12月)
2. 青木久恵、窪田恵子、庄山茂子、「我が国の看護婦養成における制服としての看護衣の始まりと文化的背景」日本看護歴史学会 第26回学術集会(2012年8月)
3. 庄山茂子、青木久恵、窪田恵子、栃原裕、「異なるデザインの看護服に対する印象評価」、繊維製品消費科学会 2012年 年次大会 (2012年6月)
4. 庄山茂子、青木久恵、窪田恵子、栃原裕、「女性用看護服に関する全国調査」、日本家政学会第64回大会(2012年5月)
5. 庄山茂子、青木久恵、窪田恵子、栃原裕、「看護師が異なるデザインの看護服に対して抱く印象」、日本家政学会第63回大会(2011年5月)

## 引用文献

1. 船津美智子, 渡辺健治:「院内感染と病院用アパレルの衛生」, 日本衣服学会誌, 41(1) 23-34 (1997)

- 2.船津美智子,渡辺健治:「院内感染と病院用アパレルの衛生」,日本衣服学会誌,42(1) 27-34 (1998)
- 3.田爪正氣,豊田淑恵,糠信憲明,築地真実,守屋優一,田近智子:「病院実習で着用した看護学生の実習衣における細菌学的汚染調査」,東海大学健康科学部紀要,6 75-79 (2000)
- 4.河地洋子,佐々木美津子,石本律子:「抗菌素材使用のナースウェア製作に関する研究」,日本服飾学会誌 16 119-131(1997)
- 5.肥塚昌子,桑島巖,鈴木康子,松下哲,蔵本築:「老年者における白衣効果の検討」,日本老年医学会雑誌,29(12) 912-917 (1992)
- 6.平泉武志,宗像正徳,田口文人,富家直明,古口高志,熊野宏昭,山内祐一,吉永馨:「白衣高血圧と心理・行動特性,自律神経機能の関係」,心身医 37 121(2001)
- 7.大西美也子,三宅良明,佐藤和雄:「妊娠時高血圧病態における白衣高血圧の頻度について」,日本妊娠中毒症学会雑誌 Vol.1 81-82 (1993)
- 8.加藤雪枝,雨宮勇,橋本令子:「被服の配色が着用者に及ぼす心理的・生理的影響」,日本家政学会誌 55(7) 541-550 (2004)
- 9.沼田里衣,中川早苗:「衣服の色彩が着用者の感情に及ぼす効果について」,日本色彩学会誌 Vol.24 110-111 (2000)
- 10.宇野保子:「近代看護婦の誕生とその服装-看護理念を支える看護服-」,国際服飾学会誌 37 巻 57-65 (2010)
- 11.看護師研究会:「看護師のための日本看護史」,医学書院 75 (1989)
- 12.松田誠:「高木兼寛の医学-有志共立東京病院看護婦教育所-」, 893-902  
[http://ir.jikei.ac.jp/bitstream/10328/3474/3/TK\\_igaku\\_893.pdf](http://ir.jikei.ac.jp/bitstream/10328/3474/3/TK_igaku_893.pdf) (2007)
- 13.慈恵看護教育百年史編集委員会:「慈恵看護教育百年史」,文栄社,東京,(1984)
- 14.遠藤武,石山彰:「写真にみる日本洋装史」,文化出版局(1980)
- 15.お茶の水女子大学:「お茶の水女子大学デジタルアーカイブス」  
[http://archives.cf.ocha.ac.jp/shiryo\\_pic.html#](http://archives.cf.ocha.ac.jp/shiryo_pic.html#) (2013)
- 16.難波知子:「近代日本における女子学校制服の成立・普及に関する考察」,人間文化論叢 第9巻 41-50 (2006)
- 17.大阪大学医学部附属病院:「医学部附属病院の変遷と看護婦・看護学生」,  
[http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/hp-nurse/graffiti/graffiti\\_3.html](http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/hp-nurse/graffiti/graffiti_3.html) (2012)
- 18.島崎恒蔵,佐々井啓:「衣服学」,朝倉書店,16-17 (2000)
- 19.昭和女子大学被服学研究室:「近代日本服装史」 155 (1941)
- 20.日本家政学会編:「表現としての被服」,朝倉書店 (1989)
- 21.藤原康晴,伊藤紀之,中川早苗:「服飾と心理」,日本放送出版協会 (2005)
- 22.大阪大学医学部附属病院:「医学部附属病院の看護職員の白衣の変遷」  
[http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/hp-nurse/graffiti/graffiti\\_1.html#1](http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/hp-nurse/graffiti/graffiti_1.html#1) (2012)
- 23.東京大学医学部附属病院:「東大病院だより ナースの誕生 制服と制帽の歴史的変遷」No.50 (2005)
- 24.ナガイレーベン株式会社企画本部での聞き取り調査ならびにカタログ資料(2013)
- 25.株式会社アイワ:チェロキー製品のコンセプト,<http://www.aiwanet.com/cherokee/products.html> (2013)
- 26.東京慈恵会医科大学附属柏病院:<http://www.jikei.ac.jp/hospital/kashiwa/index.html> (2012)